二〇二二年六月一〇日

梅雨兆す山と積まれし無縁墓　はく子
孵化しはや威嚇のポーズ子かまきり　凡士
青天の植田に水の匂ひたち　素秀

二〇二二年六月九日

梅雨晴れ間病む足宥め一万歩　たかを
尻もちの跡の残りし植田かな　豊実
短夜や積読に手を付けにけり　かえる
夏空へ試合開始のコイントス　ひのと

二〇二二年六月八日

貴船川青く点して螢の夜　みづき
吹きわたる葉ずれの音や風薫る　きよえ
今朝もまた紫陽花の毬起こしけり　明日香
苗箱のシート捲れば露の玉　千鶴
満目の青葉に埋もれ普茶料理　せいじ
慌ただし日々の隙間に柚子の花　もとこ
流木を打ちあぐ夏の濤青し　素秀
船室の小さき神棚黴にほふ　ひのと

二〇二二年六月七日

魚河岸の果ては海なり夏つばめ　ひのと
硝子戸に醫院の文字や槐咲く　凡士
母さんへ白詰草の首飾り　みきお
遠蛙古日記読む独りの夜　うつぎ
祭笛吹く白髪の背筋伸び　素秀

二〇二二年六月六日

悪口の席を抜け出て端居かな　ひのと
せせらぎの音に傾き七変化　董雨
唐門に芒種の雨の匂ふかな　凡士

アルバムへ夏服の母綴ぢにけり　ひのと
前後ろわからぬ浜の日焼の子　みきお
急磴を登り来たれば蓮浄土　せいじ
古書の香にふと懐かしき梅雨の街　智恵子
雛の声聞こえぬ朝や鳥巣立つ　智恵子

二〇二二年六月五日

ベビーバギー裸足の裏が覗いてる　明日香
蛍火のついて来いよと言ふやうに　うつぎ
緑陰に記念の朱印乾くまで　せいじ
先達に引かれ四葩の磴のぼる　せいじ
御僧は目高好きとて鉢並ぶ　もとこ
仲見世の細き片影ひろひゆく　なつき
収穫を終へて安堵や驟雨前　千鶴
夏つばめ出入りせはしき舟屋かな　凡士
十薬の花の虜や門閉ざす　満天
白球を追うて夏野へ飛び込みぬ　ひのと

二〇二二年六月四日

ほととぎす樹林つらぬくごと叫ぶ　せいじ
若楓ひと葉しのばせ旅便り　みづき
蛍火や草の中より水の音　うつぎ
風抜ける土間が涼しと犬眠る　智恵子
サングラス掛けてほど良し野良仕事　千鶴
あぢさゐの毬を背負うて陶狸　うつぎ